

第 16 回 World Knowledge Forum に参加して

一般財団法人 日本エネルギー経済研究所
常務理事 首席研究員
小山 堅

10 月 20～22 日、ソウルで開催された第 16 回 World Knowledge Forum (WKF) に参加する機会を得た。WKF は、2000 年にソウルで設立され、以降年 1 回の会合を重ねてきた。主催者は韓国のメディアグループ、Maeil Broadcasting Network (MBN) で、毎年、最もホットで重要な国際情勢・東アジア情勢を議論するハイレベルの国際会議が開催されてきた。今回の第 16 回会合にも、ブレイカー元・英首相、ガイトナー前・米財務長官、パネッタ元・米国防長官、ポール・ケネディ教授、ミアシャイマー教授などを始め、各界の著名人が参加、国際政治、世界経済、地政学等における世界の重要課題について多数のセッションでの活発な議論が行われた。主催者によれば、会議への参加登録者は約 3500 名との大規模会議である。

今回の会議の統一テーマは、「Zeitgeist : 時代精神を描く」というものであった。まさに、今日の世界が直面している重要問題とその背景にある認識・世界観、その下で今後世界がどの方向に進んでいくのかという大きな問題意識が統一テーマであり、米中関係、アジア・太平洋の安定と繁栄の課題、中東問題、ロシア問題、世界経済の展望、などの重要課題が議論の俎上に上った。その中で、エネルギー・環境に関するセッションも 5 つあり、原油価格問題等を始めエネルギーが世界を左右する重要問題として認識されていることがテーマ設定からも明らかとなった。

国際政治や世界経済などのマクロ的な視点での議論に加え、ビジネスの観点から、またロボット技術や自動運転技術など今後の世界を支える、あるいは変化させ得る高度先進技術等について議論する著名な有識者や企業関係者が参加したセッションもあり、大変興味深いものであった。しかし、今回の全体を通じた議論の中で、主催国・韓国と大多数を占める韓国の参加者にとって最も重大な関心事項として浮上している問題は、韓国にとっての対米関係、対中国関係、そして米中関係の行方ではないか、との印象を持った。多くのセッションにおいて、上述した著名な有識者等から繰り返し、米中関係の現状と今後の展望、その下での韓国の立ち位置の在り方等に関する議論や意見交換が行われ、筆者にとって極めて興味深いものであった。

台頭を続けてきた中国は、いずれ米国を総合的な国力で凌駕するのか、その過程で中国はどう米国にチャレンジしていくのか、急速な追い上げに直面している米国は対中国でどのようなグランドストラテジーを構築・展開するのか、これらは韓国だけでなく、日本にとって、世界全体にとって将来の行く末を左右する最重要問題となっている。米国の専門

家の一人は、ここまで実力をつけてきた中国が、米国が主導する秩序やルールに挑戦し、それを書き換えようとするのは当然であり、また米国がありとあらゆる手段を使ってそれに対抗しようとするのも当然である、と明言した。経済的な相互依存関係が深化している中でも、この秩序・ルールを巡るぶつかり合いはある意味必然であり、そこからまさに地政学の世界が復活している、との見方と言って良いであろう。その中で、米国にとって一つの重要なキーワードが同盟・連携である、という見解も多く示された。そこでは、米国にとっての日本、韓国、ASEAN、豪州、インド、などとの同盟が重視され、経済的には TPP などの存在がある。

韓国の参加者からは、安全保障面では米国の同盟国であるが、一方で古くからの歴史的関係と地理的な近接性を持つ中国が台頭し、経済面では最重要パートナーとなっていることから、今の「板ばさみの」な状況下で韓国がどう対応していくべきなのか、という問題意識に基づく発言・質問が数多く寄せられたことが非常に印象深かった。その中で、米国の多くの識者からは、韓国が、またいずれ実現する可能性のある南北統一した国家が、これまでの繁栄の基礎となり、価値観を共有する米国との同盟を選択することを望みたい、との明言があったことも極めて興味深かった。

なお、同盟関係という観点では、北東アジアあるいはアジア太平洋問題を考える上で、日本の役割とそれに対する米国の意識についても、会議でたびたび取り上げられたことも指摘したい。日米関係と日中関係、さらには日本における安全保障政策の展開や日本経済とアベノミクスの成否等に関して、高い関心が示されたことも特筆に値するのではないかと。韓国にとって、米中との位置関係を模索することが最重要であるが、それを考える上でも日本との関係をどうするのか、大きな問題となっていると考えられる。

また、米中関係を左右する外部要因としてのロシア問題あるいはロシアとの双方の関係や、中東問題など国際情勢について、今後の地政学的リスクの問題としても活発な議論が行われた。シリアにおける空爆開始によって、米ロ関係がますます厳しさを増す中、中ロの戦略的な同盟関係とその微妙なバランスの問題も国際政治・国際秩序を考える上で重要性を増している。世界経済の一体化が進み、主要国の相互依存関係が深まる中で、地政学的な対立の存在が直ちに経済に直接の影響を及ぼすとも限らない。折しも習近平国家主席による訪英で、中英の経済連携強化が打ち出されるなど、国際情勢には様々な複雑かつ微妙なバランスの上に立った新展開が見られている。

連携強化の一環として、筆者の参加したセッションでは日中韓ロの参加者によるエネルギー問題、即ち在来型エネルギーと非在来型エネルギーの競合、に関するパネル討論が行われた。現在の需給緩和で勝者と敗者、光と影が明確に現れる中、今の需給緩和が将来の逼迫と価格高騰を引き起こし、勝者・敗者関係の逆転も考えられる。米国との関係をどうするか、という複雑な状況を踏まえつつ、ロシアのエネルギー資源を北東アジアとしてどう活用するのかという問題が、米国 LNG が今後輸出されてくるこの地域にとっても大きな課題となっている。今後も、大きな世界観・「時代精神」を踏まえた戦略的検討が各国ともに求められて行くことになるだろう。

以上